



ぼくたちの携帯電話に、そのメールが母から届いたのは、半年前のことだった。  
一みんなに話したいことがあるから、今晚うちに集まって。

母といっしょに横浜で暮らしている父、就職して東京で暮らしているぼくと妹があて先になっていた。

「もしもし」

ぼくが電話をかけると、

「ママのメール見た？」

と妹が開口一番そう言った。

「見たよ、なんなんだよ、あのメール？」

「知らないわよ、でもなんかあったのよ。あんなメール送ってくるなんてこと、今までなかったもん」

「もしかして熟年離婚ってやつか？」

「ちょっと、やめてよね、冗談でもそんなこと言うの」

ぼくたちは、皆目見当がつかなかった。そして、それは、父も同じであった。父は、おまえたちなんか聞いてないか、とぼくのところに電話をかけてきた。

「いっしょに住んでるのは父さんでしょ？ 父さんが知らないなら、ぼくたちだってわかんないよ。彩ともさっき話したけどさ」

父も、もしかしたら、熟年離婚、という言葉が頭をよぎったのかも知れない。なんだか妙な落ち着かなさを電話口から漂わせていた。

けれど、そりゃそうだと思う。いつも顔を突き合わせてる妻が、話したいことがある、なんてメールをよこしたら、そりゃ不安にもなると思う。晩ご飯食べてるときとか、寝る前とか、朝出かける前とか、そんなちょっとしたタイミングを見計らってでは話せないこと、ってことだから。あらためられると、人間は不安になる。隠していた過去がある人は、もしやばれたのかと心配になるし、なんにもやましいことはなくても、なにかしたんじゃないか、あのときのあれをまだ怒っているんじゃないか、なんていらぬ心配をしてしまうものだ。

ぼくは、終業のチャイムが鳴ると、早々に仕事を切り上げ、東海道線にとびのった。横浜まで向かう電車の中で、妹からメールが届いた。実家のある石川町にすでに着いているから、着いたら連絡してほしい、という内容だった。そして、よく母親と幼稚園の帰りに寄って帰った昔ながらの喫茶店で待っている、と書かれていた。

喫茶店のドアを開けると、彩が手を振ってぼくに合図をした。

「父さんから電話あったよ。なんのことだか知ってるかって」

「パパも知らないの？ まったく。パパ、鈍感だからね」

「やっぱさあ、考えたんだけど、離婚くらいしか思いつかないんだよなあ」

「わたしも。パパ、もうすぐ定年でしょ。よく聞くじゃん、熟年離婚って」

彩が、今にも泣き出しそうな顔で、ぼくの顔を覗き込む。

「でも、ほら、あのふたり仲いいじゃない？ 大丈夫だよ、心配するな」

彩を落ち着かせようとする自分自身の言葉が、少し、嘘くさい。

なんの話なのだから早く聞きたいという重いとはうらはらに、店を出て家へと歩くぼくたちの足

取りは、なんだかとても重かった。

「タケル、彩」

後ろからぼくたちの名前を呼ぶ声が聞こえた。確かめるまでもなく父の声だ。振り向くと、同じような不安げな顔をした父が小走りで追いついた。

「なんなんだろうな、母さん」

とぼそっとつぶやいた。

もう空は暗かった。電灯の下を通るときだけ、そわそわしたような彩と父の顔がはっきりと浮き上がった。ぼくもおんなじ顔をしているんだろうと、なんとなくわかる。

家に着くと、玄関のチャイムを押すとき、父が一瞬ためらった。ぼくと彩の顔を交互に見て、ごくりとのどを鳴らし、恐る恐るベルを鳴らした。

「おかえり」

いつもの母の元気な声で出迎えられたぼくたちは、なんだか拍子抜けだった。

「三人そろってお帰りなのね。早く手洗ってらっしゃい」

食卓には、春巻きがどっさり用意されていた。竹の子と椎茸ともやしのたっぷり入った春巻きは、子どものときからふたりの大好物だった。

「うわぁ、おいしそう」

彩は、今日うちに帰ってきた理由さえ忘れたかのように、春巻きを目の前にして目を輝かせている。ぼくは、母の動きにおかしなところはないか、観察するような目でテーブルに料理を並べていく母を目で追っていた。けれども、母は、やっぱりいつもと同じ様子で、離婚のような後ろ暗い話を持ち出すような雰囲気は少しも感じなかった。それどころか、なんだかうきうきしているような、はりきっているような、とてもすっきりした顔をしているのだった。父はというと、母とは対照的に、イスに座っている姿もぎこちないといった頼りなさで、何事もなく嵐が過ぎ去ってくれることだけを願っているような表情だった。

「さあ食べましょうか」

母の春巻きは、とても懐かしい味がした。一人暮らしのアパートメントの近所の中華料理屋で食べる春巻きもおいしいけれど、母の春巻きは、おいしさに安心感がプラスされたほっとする味がした。いっしょに暮らしていたときは感じなかったけれど、母がこうしてご飯を用意して待っていてくれる我が家に帰るのが、どんなに幸せなことだったかを思い知らさせる。電気もついていない一人暮らしのアパートメントに帰るのは、なんとも言えず心細い感じがする。最近どうなの、仕事は。という母の問いかけに、まあ忙しいよと適当に答えた。仕事のことなんかどうだってよかった。今日は、母さんの話を聞きに来たんだよって声に出さずにつぶやいた。みんな、母さんが話し出すの待ってるんだよ。だんだんといらいらしてきている自分に気がついたとき、

「母さん、話ってなんなの？」

と、ぼくは言葉にしていた。

食卓が水を打ったように静まりかえった。外で消防車のサイレンが鳴っているのが聞こえた。反応した犬がどこかで吠えていた。

「母さんね……」

母が箸と茶碗をそっと置いて大きく息を吐いた。

「母さんね、乳房再生手術を受けようと思ってるの」

ぼくと彩は顔を見合わせた。父は、恥ずかしそうにしている母の顔を驚いたような顔で見つめていた。

「ほら、父さんももうすぐ定年退職じゃない。そしたらいっしょに温泉にでも行きたいもの。でもね、母さん、こんな胸じゃ恥ずかしくて温泉に入る勇気ないもの」

そう言って、三年前に乳がんの手術をして乳房をとったほうの胸をそっと押さえた。

「いいじゃん、ね、パパ、手術受けさせてあげてよ。ねえ、いいでしょ？ ママの胸、あんなに大きかったんだもんね」

父は、母の目をじっと見つめたまま、しばらく返事をためらっているかのように口を開こうとしなかった。けれども、口元をゆるめたかと思うと、

「いいんじゃないか。反対する理由はないよ」

と目を細めた。

あのときの母のうれしそうな顔は、これから先もずっと忘れないと思う。手術をした後の、悲しそうな母の顔も同じようにずっと忘れられそうにないけど。でも、母さんはやっぱり笑った顔のほうが素敵だ。

母から携帯電話に届いたメールには、母の水着姿が写っている。いま、父と母は、ハワイ旅行に出かけている。温泉に行きたいとっていた母は、胸が元のようになったとたん、水着が着たいと言い出した。そして、温泉はハワイに変更された。

いい歳して水着ではしゃいじゃって。母の無邪気さに息子としてちょっと照れくさいけれど、やっぱり笑顔の母を見ると、ぼくは、ほっとする。これから、もっともっといろんなところに出かけて、この何年間かの母がふさぎこんでいた時間を、父さんがとりもどしてあげてほしい思う。写真の中で、はしゃいでいる母の、大きな胸が、揺れたような気がした。